

医療・介護サービスと生活支援の助け合い活動とのネットワークをどうつくるか

提言

医療・介護の専門職と助け合い活動は、スクラムを組んで前進しよう。時間がかかることを恐れずに、住民を信頼して取り組もう。

登壇者

【進行役】	中村 秀一氏	(一社) 医療介護福祉政策研究フォーラム理事長
	小野 健悦氏	(医) 博仁会 志村大宮病院法人サポート部副部長
	中島 由美子氏	(医) 恒貴会訪問看護ステーション愛美園所長
	早川 仁氏	流山市健康福祉部長
	佐藤 寿一氏	(社福) 宝塚市社会福祉協議会常務理事

■ 寄せられた声から

- 地域住民の方の参加、発言できる場づくりが重要。「短時間で結果を求めない。形にはめない」。心強い言葉。
- ガンは今でも「死」をイメージする病です。本人、家族のつらさは、経験しないとわからないのかもしれませんが。中島さんのような思いのある看護師さんがもっと増えるといいなと思いました。たくさんの方々の巻き込みながら、どんどん活躍してください。

■ 議事要旨 中村 秀一氏

各登壇者からの発表、討議、フロアからの質疑、まとめという形で進行した。

佐藤寿一氏（宝塚市社協常務理事）からは、①住民活動の展開には「話し合いの場」が不可欠で、②場づくり、活動の展開には時間がかかること、③住民の活動範囲に合わせたエリアの設定が必要であること、④地域づくりの主役は当事者や住民であること、という指摘があった。「地域で協働できる専門職」とは、「住民を資源として使う」のではなく、「住民に使われる専門職となる」ことが必要だと提起された。

宝塚市の地域福祉活動は、市内の7ブロック、20の小学校区単位で行われている。阪神・淡路の大震災（1995年）の被災経験から機運が高まり、1997年からまちづくり協議会を中心とした小学校区単位での取り組みを支援する「福祉コミュニティ支援事業」が開始された。重要なのは時間をかけて進めてきたことで、住民主体の話し合いの場である校区ネットワーク会議は2002年にブロック単位で5ブロックから開始されたが、住民からの要望で2005年から小学校区単位での開催となり、2018年に全ての小学校区でネットワーク会議が開催されるようになっていく。

中島由美子氏（訪問看護ステーション愛美園所長）からは、訪問看護でがん患者の在宅看取りを行う中で、地域で患者と家族が参加するがんサロンの運営に至ったという活動の紹介があった。専門職としては、住民との協

働には情報の共有が必要であるが、むしろ、専門職間の情報の共有がないのが深刻で、病院のスタッフが地域の医療・介護の実情を理解していないことが地域包括ケアシステムの実現の障害になっている。

小野健悦氏（志村大宮病院法人サポート部副部長）からは、病院職員が個人の資格で地域活性化プロジェクトに取り組んでいるフロイデDANのプロボノとしての活動の紹介があった。当初、病院職員として「地域」に飛び込むのが全く相手にされず、その反省の上で、①「地域の声を聞き、地域のお手伝い」に徹し、それが②地域の方とフロイデDANが共同企画するまでに進み、さらに③地域の方がフロイデDANの企画に参加されるようになり、今日、④フロイデDANのメンバーは常陸大宮市の各種計画の策定委員になっている。

早川仁氏（流山市健康福祉部長）からは、市町村のマネジメント力が問われる時代であり、行政は黒子に徹するという報告があった。行政の役割は、住民と事業者、フォーマルサービスとインフォーマルサービスが出会う「場と機会」を用意することである。市役所に求められるのはビジョンの提示であり、国に対してはもっと柔軟性と自由度を持った制度設計が求められる。

以上の議論を踏まえ、当分科会の提言として「医療・介護の専門職と助け合い活動は、スクラムを組んで前進しよう。時間がかかることを恐れずに、住民を信頼して取り組もう。」とまとめた。

アンケートの結果 参加者概数：91名 回答者数：70名

